

立ち かひある

Vol.5



特集 十文字学園100周年

「創立100周年記念式典」挙行

《第一部》開学の志と推進力を私たちも
《第二部》生徒・学生の至芸を堪能

建学理念コンクール理事長賞受賞作「全文」

十文字こと先生へ

平川あずさ（十文字高等学校、十文字学園女子短期大学卒業）

人のために

横須賀邦子（十文字高等学校、十文字学園女子短期大学卒業）

十文字学園を導く「日本の知性」から
次の100年に向けての提言

大石 裕先生（社会学者・慶應義塾大学名誉教授）

船曳建夫先生（文化人類学者・東京大学名誉教授）

辨野義己先生（生物学者・国立研究開発法人理化学研究所特任研究員）

渡辺 保先生（演劇評論家・日本芸術院会員）

十文字学園創立100周年記念講演

多様な個が輝く新時代へ―植木朝子同志社大学学長

「中高合同体育祭」で共有された
高揚感と一体感

東京国際フォーラムで

「100周年記念発表会」を開催

社会貢献活動で輝く十文字生

《巣鴨発》#Clean Up Otsuka

《巣鴨発》交通安全運動・交通安全イベント

《巣鴨発》2022Xmas Otsuka SDGs Event

《新座発》パープルリボンパネル展

《新座発》ウクライナのひまわり畑アート展

十文字こと物語 最終回

今も生き続ける学園創設の大志

JUMONJI TOPICS

園庭のうた 2022幼稚園行事・イベント



特集 十文字学園100周年

「創立100周年記念式典」挙行



※第一部

開学の志と推進力を私たちも

令和4（2022）年6月10日、十文字中学・高等学校の講堂において、十文字学園創立100周年記念式典が挙行されました。

式典の第一部は、中学・高等学校の吹奏楽部が演奏する「十文字学園校歌によるファンファーレと序曲」で始まり、厳かな雰囲気の中で進められました。

式典第一部の冒頭、十文字一夫理事長による挨拶の辞がありました。

「創立以来100周年、校歌に示される建学の精神と自ら強めて息まざる日々の営みを重ね、大学、短大、中学、高校、幼稚園、あわせて8万名におよぶ卒業生を世に送り出し、一定の評価を社会から頂戴することができるようになりました。

たこと、ひとえに卒業生の各方面での活躍の賜物であり、また、特に人生の大半の時間とエネルギーを学生、生徒、園児のために費やしてくださった教職員の皆様のおかげと深く御礼を申し上げる次第でございます。

創立者十文字ことは、歴史や伝統は回顧的、消極的なことと捉えがちであるが、



十文字一夫理事長



進むべき道を一直線に誤りなく前進させる推進力がこの歴史と伝統にあり、進歩的、積極的なものであると申しております。こうした意味において本日は過去に感謝を捧げる日であり、前進を誓う時であると考えております。

社会における女性の活躍が今まで以上に求められる今日、女子教育の重要性が増しております。これからの学園の将来を共に担っていただきたいと、心から願っております。

十文字理事長の挨拶に続き、横尾康治（よこお こうじ）中学・高等学校校長が式辞を述べました。

横尾校長は、大正11（1922）年に文華高等女学校として産声を上げた学園の歴史を振り返りつつ、こと先生が目指した建学の精神（自強不息の精神）に触れて、次のように言葉を続けました。

「私が思う十文字生らしさとはカインドネス（Kindness）という単語で表現できていると思います。ボランティア精神に溢れている生徒が多く、とても思いやりがあります。いつの時代にもあてはまる十文字生の特徴であり、それが伝統です。

世界的に見ると、日本ではまだ、女性の地位は低く、少子高齢化や自然災害、



横尾康治 十文字中学・高等学校校長



志村二三夫 十文字学園女子大学学長



佐々木泰子 お茶の水女子大学学長



高野之夫 豊島区区長

エネルギー問題など、多くの課題を抱えています。そのような時代だからこそ、学校が果たすべき使命があります。

子どもたちが本学園に通うことで、大きな夢を持ち、その夢を実現するために学び続ける人に育ってほしい。学ぶ楽しさを実感し、知識を知恵に変え、人類の幸福のために率先して行動できる女性に育ってほしい……。

それが育てたい生徒像です。そのような女性をひとりでも多く世の中に送り出すことが本学の使命です。

今後、より教育の質の向上を図り、使命を全うするべく、教育活動を充実させていく所存です。引き続き、皆様のご協力とご助力をお願い申し上げます」

続いて教職員を代表して壇上に立ったのは、志村二三夫大学学長でした。

志村学長は、教職員自身が、学生・生徒を教える育みつつ、建学の精神に沿って自らを鍛えて成長することができたことに感謝するとしてうえて、次のように述べました。

「こと先生は、私には娘と孫が大勢います」とおっしゃったそうです。私たちはほぼ全員、こと先生、大元先生の遺伝子（gene）を受け継いではいません。しかし、ミーム（meme）を引き継いでいます。ミームとは、見聞きしたことなどのコピーによって、脳から脳へ伝わる文化の伝達の単位。進化動物学者リチャード・ドーキンスの提唱によります。

私たちは、学園歌や自彊不息など、

先輩方が築き伝えてくださった十文字文化のミームを受け継いだ、こと先生、大元先生のチルドレンです。

自彊不息は理想の人格（君子）は自ら勤め、励む。鍛え続けることとしています。

学園歌の中に「世の中に 立ちてかひある 人と生きなむ」とありますが、社会人として自立し、人々と心を交わし合い、協働する中で、心を鍛え続ける人、それが君子です。学園歌や自彊不息は、時代や国、地域を超え、人が生きる道理、普遍的な価値を示していると同時に、十文字の民主的、平和で自由な風土の基盤です。

十文字には100年を経て、揺るぎのないサステイナブルな組織文化（持続可能で多様性と包摂性のある組織文化）が根づいています。十文字100年の先、学園の持続的発展のため、私たちは、こと先生、大元先生を起点とする十文字文化を末永く、広く伝える役目があります。そのために、皆で鍛え続けましょう」

その後、主賓の佐々木泰子お茶の水女子大学学長、坂元章お茶の水女子大学副学長、高野之夫豊島区長をご紹介して、佐々木お茶の水女子大学学長と高野豊島区長からは、心のこもった祝辞をいただきました。

十文字学園は、大正11（1922）年に、戸野みちる、斯波安、十文字ことの3人の先駆者によって創立されましたが、いづれも東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）の同窓生であったというこ

永年勤続職員代表の
清田和久 学監



高等学校前中央委員長による
生徒代表挨拶



岡本英之 学園創立100周年実行委員長



十文字佑子 副理事長



縁がありました。また、学園創立以来、豊島区巣鴨の地で近隣地区の方々のお世話になっていることから区長をお招きしました。

来賓の方々に続いて祝辞を述べたのは生徒代表（高等学校前中央委員長）で、次のように力強い決意を表明しました。

「100年という歴史ははるか遠いことに思えますが、連綿と続く十文字の歴史を振り返ると、先輩方と私たち在校生は繋がっているのだと感じ、心強く思います。時代は変わっても、世の中に立ちてかひある人」を追求する理念に変わりはありません。

記念すべき節目のこのときに、古きを温ねて新しきを知るといふ温故知新の精神を胸に刻み、先輩方の足跡を大切にしつつ、私たちなりの新たな一歩を踏み出したいと思います」

そしてその後、永年勤続職員代表の清田和久学監による祝辞と続いた後、十文字佑子十文字学園副理事長により、「十文字学園創立100周年記念建学理念コンクール」の理事長賞受賞者への表彰が行われました。

今回の建学理念コンクールは、学園創立100周年を記念して実施され、十文字中学・高等学校の生徒・十文字学園女子大学の学生の他、同窓生（さくら会会員・若桐会会員）などに広く募集したものでした。

その呼びかけに応じて寄せられた数多くの応募作品の中から、高校45回・短大

家政学科食物栄養専攻卒業の平川あずささんと、高校29回・短大初等教育学科卒業の横須賀邦子さんのおふたりが理事長賞を受賞されました（理事長賞の全文は8～9ページ）。

式典の第一部の最後を締めくくったのは、岡本英之学園創立100周年実行委員長による次の挨拶でした。

「皆様、本日はご出席いただき、ありがとうございます。また、ご来賓の方々には温かいお言葉をたまわりまして、誠にありがとうございます。

さて、十文字学園はたゞいま、皆様とともに新たな一歩を踏み出しました。これまで続けてきた、100年の歴史と伝統を継承し、そしてここで学んだ多くの卒業生の方々の思いと、また多くの先輩方への思いと感謝の気持ちを忘れずに、次の100年に向けて、皆様とともに歩んでまいりたいと思います。

時代は目まぐるしく変化しています。明日からの100年、想像もできない困難に遭遇することがあるかもしれません。

しかし建学の精神を心に、皆で力を合わせて、乗り越えて、さらに十文字学園の教育を発展させていきたいと思えます。

その決意を新たにして、簡単ではございますが、私からのご挨拶とさせていただきます。今後とも、ご支援、ご協力をなにとぞよろしくお願い申し上げます」

この日から、十文字学園は100年先を見据えた「未来に向けての新たなスタート」を切りました。

創立100周年記念式典



第二部

生徒・学生の至芸を堪能

第一部に続いて行われた式典第二部では、十文字中学・高等学校の能楽部、マンドリン部、大学のJ和太鼓部が演奏を披露しました。

登場した生徒・学生たちは、「十文字学園創立100周年記念式典」という特別な場で演技・演奏できることに大きな喜びと感謝の思いを胸に、この日を楽しみにしていました。

そして満席状態となった十文字中学・高等学校の講堂で、全員が一体となり、

コロナ禍で思うように活動ができない中でも鍛錬し続け、磨いていた技で、会場をおおいに盛り上げました。

この経験はきっと、彼女たちの記憶に一生残ることでしょう。そしてまた、「十文字魂」は後輩たちにもしっかりと受け継がれていくことは間違いありません。



十文字中学・高等学校 能楽部



日本文化の深みを伝えた能楽部による華麗な演舞。
この日の演目は「高砂」と「小袖曾我」でした。



会場中にとどろく圧巻の迫力で会場を沸かせた
十文字学園女子大学のJ和太鼓部。演目は「山
呼」と「弾打」でした。

十文字学園女子大学 J和太鼓部



マンドリン部OGによる独奏



十文字中学・高等学校のマンドリン部の
OG・高橋鈴奈さんの独奏は会場に集う
人々の心に染み入りました。



十文字中学・高等学校 マンドリン部



十文字中学・高等学校のマンドリン部による息のそろった演奏で記念式典第二部はフィナーレを迎えました。
演目は「海の少女」でした。

建学理念コンクール 理事長賞 受賞作「全文」



平川あずさ

（十文字高等学校、
十文字学園女子短期大学家政学科食物栄養専攻卒業）

十文字こと先生へ

十文字高校、短大食物栄養専攻の卒業生の平川です。卒業してからかれこれ28年ほどが経ちました。

今日は、私が十文字学園に入り、建学の精神である校歌を胸に刻んで生きてきたことで今の私があるということを、こと先生（失礼ながらいつもの通りにそう呼ばせていただきます）にお礼申し上げたく筆をとりました。

私は、幼少のころから身体を動かすことと食ることが大好きで、現在は、健康科学に関わる研究や情報発信に携わっています。小学校時代はミニバスケットボール、中学校では卓球に熱中し、卓球については、江東区の大会で、個人・団体戦ともに、何度も優勝を収めました。高校時代にも、私学大会の個人戦で準優勝をしました。でも、そのことよりも、

毎朝自強（じきやうじゆつ）術（じゆつ）体操を行い「身をきたへ心きたへて 世の中に たちてかひある人と生きなむ」という教えを学んだことが、私の将来に力を与えてくれました。

というのも、社会人になって働き始めの頃は、心が弱く、一生懸命に仕事をこなしていても、足を引っ張られることで辛い日々が続く、自分の中で受け止められないこともありました。病院勤務の栄養士の仕事は、3Kと言われる時代で、

当直もあり、朝9時から翌日の14時まで（仮眠はとるものの）働くというところもありました。当然、栄養指導を学べるわけではなく、厳しい下積みが続きました。それでも、自分なりに目標を持っていた。『いつか食の力で国民を健康にする仕事をして、役立つ人になるんだ』と。実務経験を3年積んだ後は、管理栄養士を目指しました。そして、総合病院だけ

ではなく、急性期医療の病院でも働き、栄養サポートチームとして働けるまてになりました。

管理栄養士の力になることこそが、多くの患者を助けることにつながると信じ、栄養士・管理栄養士向けの雑誌の編集者に転身しました。ところが、その雑誌は、創刊102年で廃刊になってしまいました。そこで、今度は、医師と栄養士の間に共通言語を作り、「医」と「食」を合わせた情報を提供する目的で、医師の先生と「医と食」という雑誌の創刊に携わりました。副編集長を務め、約10年間関わりました。

私の場合には、どんなに辛い時にも必ず助けてくれる友人や先生、励ましてくださる短大の恩師がいました。そのことがどんなに心強かったことか。そして、

このことは、分野は違えど、小泉信三先生の「スポーツの与える3つの宝」に記されているとおりでした。3つの宝である「練習は不可能を可能にする」「フェアプレーの精神」「友」、これら3つとも人生において必要不可欠であり、自分自身も日々の忍耐によってこの宝を授かっていたことに気づかされました。

さらに、社会人としての年数が経てば

経つほど、生活するうえでの判断の基準となる知恵や本質を見抜くことがより大切に感じるようになりました。加えて、知識を噛み砕いて、あるいはエビデンスを示しながら、わかりやすく情報提供したり、情報を必要としている人々へ橋渡ししたり、さらに、人と人をつなぐことでその知識をもっと意味のあるものにしていく（公衆衛生的な考えで、多くの人々に役立つものとしていく）ことが、私がやるべきことなのではないかと、最近思うようになってきました。

私は現在、内閣府の食品安全委員会では技術参与として働いて4年目です。徐々に色々な企業から商品企画の相談を受けたり、食育の委員会や、著名な教授の方々と一緒に会議に参加したりする機会に恵まれました。私が、いくぶん遠回りをして、このように歩んでこられたのは、こと先生の教えのおかげです。

こと先生、私は、以前、国立健康・栄養研究所の初代所長の佐伯矩先生について調べたことがあります。その際、十文字学園女子大学の先生から、こと先生が佐伯矩先生のもとで学んだことをお聞きしました。こと先生も同じ健康科学を扱う栄養士であり、大先輩だったと知って胸が熱くなりました。心と身体を鍛えることこそが、健康な精神と健康な身体を培う。その先には、自分らしく社会で働くことがあり、健康な心と身体が、夢を叶える原動力になる。それをこと先生が教えてくださったのだと、改めて感動いたしました。こと先生、本当にあ

りがとうございました。そのお導きに深く深くお礼を申し上げます。

これから先生のお話を大切に、日々心と身体を鍛えて、新しい科学を学



人のために

横須賀邦子

(十文字高等学校、
十文字学園女子短期大学初等教育学科卒業)

び、精進して参ります。またお手紙を書きます。どうかいつまでも学園で学ぶ生徒や学生、卒業生である私たちを見守ってくださいます。最後になりましたが、100周年おめでとうございました。

ていますので、病気で休むことはほとんどありません。

令和二年二月から、感染拡大防止のために、日本中で今までにない対応が始まりました。小学校に子ども先生も来られない日が続きました。学校に誰もいない状況に、私の心身は疲れたようで、初めての経験となる検査入院をしました。ところが、ありがたいことに、検査結果に異常は認められず、「どうして検査入院したのですか？」と医師に言われてしまいました。やはり、身も心も鍛えられていました。

当時、自彊帽はちよつと嫌だなと思っていました。自彊帽は、強い心身を作ることができました。体育の時間に自彊術のテストがあったことを思い出します。今でも、時々「よいい、はじめ、一、二、さん：九、十」と声を出して自彊術をすることがあります。自分の身体を自分で鍛えることで心が鍛えられ、メンタルヘルスの強い柔軟な心身になる——そのことを痛感しています。

現在の私は、教員となつて四十三年目、再任用の校長として勤務しています。自分の母校で教諭でも勤務し、校長でも勤務しています。「昭和で六年間、平成で六年間、令和で六年分」と保護者に伝えました。母校に校長として勤務できるのは、とても嬉しいことです。

私は朝会で話するのが好きです。コロナ禍での朝会はテレビ放送なので、テレビに出る女優(?)のように人気者です。色紙に「愛」や「夢」の文字を書いて、文字のつくりを説明します。「誰のために勉強するの?」と問うこともあります。子どもは「自分のため」と言います。でも、校長の私は「人のために勉強する」と伝えます。団扇の表に笑顔マークを、裏に「人のために」の文字を書いていきます。教室にこの団扇を持って行き、あおいであげると、子どもは優しい笑顔になります。人のためになることは、人を笑顔にするのだと子どもはわかってくれます。

こと先生、もうおわかりでしょうか。「世の中に立ちて甲斐ある」の言葉がずっとずっと私を支えているのです。十文字での五年間が、こんなに今までに続くとは思っていませんでした。

「身をきたへ 心きたへて 世の中にたちてかひある 人と生きなむ」

この校歌が、私は大好きなのです。私の人生で、この校歌が様々な時に助けてくれます。大切な人を亡くした時にも、未曾有の経験をした時にも、覚悟を決めて判断しなければならぬ時にも——。なぜなら、私も人のためになっていると思えるからです。実は、結婚して一年も経たずに夫が亡くなりました。この時も不幸ではなくさみしいだけだと、さらに人のために生きようと強く思いました。

こと先生への手紙の最後となりますが、こと先生への感謝と共に、十文字高校への進学を勧めた両親へ心から感謝をします。両親は、私たち姉妹に愛情をたっぷりと育ててくれました。このたつぷりの愛のおかげで、私は人のために愛をたつぷりと渡すことができています。こと先生、これからも人のために生きていきます。どうぞ見ていてください。

高校生の時のことです。「一文字三味線」「二文字ギター」「三文字ピアノ」……「十文字こと」と、こと先生の銅像の近くにあったベンチに座りながら、友達と言葉遊びをしていました。こと先生は、聞いていらしたことでしよう。友達と一緒にいることが楽しくて、思い出話の中に、この言葉遊びが必ず出て、やってみることがあります。今でも高校生の時からの友達と、食事をしたり旅行に行ったり、楽しい時間を共に過ごしています。

セーラー服を着て、毎朝自彊術をしていた頃から何年経ったのでしょうか。私たちを見守っていた銅像のことと先生より、私は年上になっているのかもしれない。こんな私のことをこと先生にご報告したく、手紙を書いて自分の人生も振り返ってみたいと思います。

私には、姉がいます。高校を選ぶ時に

両親は「女子の教育」を考えて十文字高校に決めたようです。姉は、十文字学園女子短期大学の初等教育学科に進みました。妹の私は「姉とは違う」と強気でいしましたが、全く同じ学校に進みました。娘たちに学ばせる学校について、両親の選択は正しかったのだと、今も強く思います。そして、「女子の教育」を願うことと先生の強い信念があり、十文字学園を創立するという強い気概と覚悟があり、あったからこそ、私は十文字で学びを深めることができました。通学している時には、あまり考えることもなく、「一文字三味線……」なんて言葉遊びをして申し訳なく思っています。

白い自彊帽をかぶって校庭に整列して、「よいい、はじめ」の声で毎朝行つた自彊術。その後、十文字短大の初教(初等教育学科)に進学し、卒業後は、埼玉県の小学校教育論になりました。身を鍛え



いまここにある100年後

十文字学園女子大学特別招聘教授

船曳建夫先生

(文化人類学者・東京大学名誉教授)

100年後の予想というのは昔からあった。それによると、人は男女共にのっぺりした衣服を着て、錠剤で栄養を取り、超高層に住み、世界中の人と自在に交流するようになるとされた。そうした技術的なことはだいたい当たった。だが外れたこともある。外れた予想の大部分は、女性が自由に生きる社会的環境の変化である。その変化はあまりにも遅い。私には3人の姉がいて、彼女たちはいずれも「立ちてかひある」道を進んだが、それゆえにか社会的困難に出合った。

私が男で「下駄を履いて」来たからよくわかる。十文字学園は100年前に、十文字こと先生によつ

て、「立ちてかひある」と女性の自立を目指して創立された。だが、その道のりは難しく、厳しいものだったのである。そのことは100年後のいまも同じらしい。ある予測だと男女の経済平等が達成されるのはなんと151年後(！)だと言う。とすると、結局、待っても仕方ない。常に「いま」しかない。学生たちにいまの困難さに立ち向かう元気を与えることしか、学園のすべきことはない。

【プロフィール】1948年、東京都出身。東京大学教養学部教授、東京大学大学院総合文化研究科教授などを歴任後、2012年に退職。2020年より十文字学園女子大学特別招聘教授となり、講義・ゼミナールなどの教育活動を再開している。



大切な「建学の精神と伝統」の継承

十文字学園女子大学特別招聘教授

大石 裕先生

(社会学者・慶應義塾大学名誉教授)

私立学校は建学の精神、その精神をもとに培ってきた伝統を継承していくことが何よりも重要である。十文字学園は日々の教育を通じて、それを実践してきた。『十文字学園五十年史』を開いてみると、1945年4月14日「戦災により校舎全部が焼失」という記録がある。ところが驚くべきことに、同年5月1日には「東京女子高等師範学校附属高等学校の校舎の一部を借り仮校舎」として教育活動を再開し、翌46年11月20日には校舎などの復旧工事に着手し、1年後には工事はほぼ完成している。十文字学園は、伝統を継承してきただけではない。大きく変化する環境に主体的かつ積極的に対応してきた。学園の戦後復興のスピードがそのことを物語っている。これは十文字学園の次なる1

00年を考えるうえで大きな示唆を与えている。私の研究対象であるコミュニケーションの分野では、インターネット登場以降、メディアは大きく変化してきた。コミュニケーションの基本である対面の対話は大切である。しかし同時に、日々変化する情報環境に適切に対応し、情報発信を行うことも求められている。日々の学習の中でこの課題に積極的に取り組むこと、それが生徒や学生の成長、学園のさらなる発展の鍵になるのではないか。そうした思いを胸に私は授業に臨んでいる。

【プロフィール】1956年、東京都出身。関西大学社会学部、慶應義塾大学法学部政治学科教授などを歴任後、2021年退職。現在は、本大学などで、「ニュースの見方、考え方」、「ジャーナリズム論」などを講義している。

次の100年に向けての提言



百年の伝統

十文字学園女子大学客員教授

渡辺 保先生

(演劇評論家・日本芸術院会員)

武蔵野の台地が遠く秩父まで連なり、一筋の川と江戸時代以来の由緒のある古い街道が走る、その丘陵のほとりに十文字学園女子大学がある。

はじめてそこへ行ったときに、私は大学の広い校庭にある何本かの大樹に目を奪われた。

今思えば、あの巨木の連なりこそ、この学園百年の歴史を象徴している風景であった。

私は縁があつてそこで何度か講義をした。

それから幾星霜……。

ある日、ある講演を終わったところで、ひとりの女性に声を掛けられた。

彼女は十文字学園のそのときの私の生徒で、私の講義したことを私自身よりもはるかによく覚えていてく

れた。

そのとき、私は、これこそが創立以来十文字家三代が目指して来た女子教育の成果かと思った。

彼女は、どこの大学の生徒よりも私の教えたことを身に付けていたからである。

学園創立百周年。まことにめでたい。そしてこれから先、この学園の新しい世界が始まるに違いない。

その歩みを力強く支え、推進するのは、歴史を受け継ぐ学生たちと、彼らを支える教員を含む職員たちの存在である。

【プロフィール】1936年、東京都出身。慶應義塾大学経済学部卒。東宝演劇部企画室を経て、慶應義塾大学、東京大学等で教鞭を執り、1994年から淑徳大学、2002年から06年まで放送大学の教授を務めた後、放送大学名誉教授。日本芸術院賞・恩賜賞受賞。



最高の腸活のススメ

十文字学園女子大学客員教授

辨野義己先生

(生物学者・国立研究開発法人理化学研究所名誉研究員)

人は誰もが元気に健康で長生きをしたいと願うものです。健康であることは、笑い、愛を育み、仕事をし、自分の夢を実現するという人生の目標をかなえる助けとなります。

そのためには、長寿菌（酪酸産生菌とビフィズス菌）優勢の腸内環境をつくり、毎日いいウンチを出す「腸活」をスタートに越したことはありません。

健康長寿者に共通している腸活は、大きく次の3つ。

①食物繊維をたくさん摂っている▽食物繊維は長寿菌を増やすための要です。

②食物繊維とプロバイオティクス（人体に良い影響を与える微生物「善玉菌」）をバランスよく摂っている▽長寿菌に力を発揮させ、いい便を「育てる」ためには、

このバランスが必要不可欠です。

③身体をよく動かしている▽毎日身体を動かす生活によって、インナーマッスルが鍛えられ、排便がスムーズになるのです。

さらに今、ストレス緩和・睡眠の質向上にも腸活が大切であることが指摘されています。

社会で活躍するには、まず健康な身体が必要です。

十文字のみなさんも、寿命さえ左右する臓器である「腸を制することこそが快適な健康長寿を手にする最初の一步」であると肝に銘じましょう。

【プロフィール】1948年、大阪府出身。理化学研究所で腸内細菌の第一人者として同研究所イノベーション推進センター・辨野特別研究室特別招聘研究員などを歴任し、現在も一般財団法人辨野腸内フローラ研究所理事長として活躍している。

十文字学園創立100周年記念講演

多様な個が輝く 新時代へ



植木朝子 同志社大学学長

2022年5月21日、十文字学園創立100周年記念行事のひとつとして、十文字学園女子大学の記念ホールで、同志社大学第34代学長の植木朝子先生の講演が行われました。

講演のテーマは「多様な個が輝く新世代へ」。講演会場となった記念ホールには、地域の方に加え、本学教職員と約500名の学生が集まり、熱心に耳を傾けました。その模様はオンラインでも配信され、大きな反響を呼びました。

として本学に着任。2001年には同専攻の助教授となり、2003年に十文字学園女子大学社会情報学部コミュニケーション学科に移籍。2005年4月に同志社大学に移られるまで、本学で教鞭を執っていらっしゃいました。

植木先生の教育者としての歩みは、まさに十文字学園で始まりました。先生は本学での日々を次のように振り返ります。「私の教育経験は、十文字学園から始まっており、一緒に先生方、職員の皆様方、そして何より生徒さん、学生さんたちから、多くのことを学びました。本当に感謝しています」

その後、本学を離れた植木先生は、同志社大学にて文学部長・副学長と要職を務め、2020年に学長に就任。就任当時、同志社大学初の女性学長として注目されることになりました。就任に際し、先生は「ダイバーシティ推進」を改革のひとつに掲げ、「女性のトップがもっと増え、特別なこととして注目されないのが望ましい」と述べられました。現在、学長としてダイバーシティ・キャンパスに向けての取り組みを積極的に進めています

らっしゃいます。

ご自身は女子大学で学び、現在は共学の大学でダイバーシティの推進に取り組む植木先生。多様性が求められる現在、女子大学で学ぶ学生、そして女子教育に携わる教職員にどのようなメッセージを届けてくださるのだろうか。そんな思いがこの講演会を開催するきっかけでした。

同志社大学で進める

「ダイバーシティ推進」

「同志社大学ダイバーシティ推進」には4つの柱があります。「ジェンダー・男女共同参画」「SOGI（性的指向と性自認）」「グローバル化推進」「障がい学生支援」の4つです。講演では、それぞれ具体的な取り組みが紹介されました。そして、教育機関として大切なことは、アンコンシャス・バイアス（無意識の根拠のない思い込みや偏見）への気づきを促進し、多様性を感情ではなく、知的行為たる学問を通じて理解するように促すことだと述べられました。

とはいえ、その道のりは簡単なものではないとあります。先生は次のように指摘さ

十文字学園女子大学から始まった 植木先生の教育者としての歩み

実は植木朝子先生と十文字学園にはとても深いご縁がありました。

植木先生は、日本文学を専攻する大学院生として、お茶の水女子大学大学院で

研究に励む傍ら、1991年4月から1995年3月までの4年間、十文字高等学校で国語の非常勤講師として生徒たちの指導にあたりました。1995年4月からの1年間は、十文字学園女子短期大学文学科国語国文専攻（当時）の非常勤講師を務め、1996年4月に専任講師



講演会場となった記念ホールは、熱気に包まれた

れます。

「私が同志社大学に勤めるようになって印象的だったのは、たとえばゼミでゼミ長を決めるというようにときに、男子学生がいるとたいいてい男子学生がゼミ長になってしまふことでした。

私が所属している国文学科は女子学生のほうが多いのですが、それにもかかわらず、男子学生がゼミ長になることが多い傾向があります。女子学生は男子学生に対して遠慮があるのか、それとも面倒なことは男子にやらせてしまおうという計算なのか……。後者ならまだいいのですが、もし男子学生を立てないとい

というような思いがあるとしたら、それは女性自身の中にあるアンコンシャス・バイアスです」

では、女子校・女子大学で学ぶ意義とは何なのでしょうか。

十文字学園のみなさん!! 視野を大きく広げましょう

「私は、女子校・女子大学には『攻め』の意義と『守り』の意義があると思います。攻めの意義とはよく指摘される通り『リーダーシップを育む』ということです。女子校・女子大学では、たとえば文化祭を実施する場合、実行委員長も副委員長も当然女性です。テントを立てるといった力仕事もちろん女性だけでやります。先ほど、男子学生がゼミ長になるケースが多いことを紹介しましたが、男性の存在を意識することがないために、女性の積極性、リーダーシップを涵養（かんよう）することができるといふ点が、女子校・女子大学の攻めの意義になるでしょう。

対して守りの意義ですが、社会に出ると否応なく直面せざるを得ないジェンダー不平等から、学生時代は守られるという利点があります。

そんなふうに甘やかしてはいけないという考え方もあるかと思いますが、ジェンダー不平等の嵐にさらされる前に、その風雨に耐える力を蓄えるのだという考え方もできるでしょう。

私は女子大学で学び、学びを深めるため、当然のように大学院に進学しました。



講演後の記念撮影

ところが共学の大学に通っていた女性から、「女性が大学院に行ってもしかたがない」と教員や男子学生が平気で言っていることや、女性が大学院を受けてもなかなか合格しない、といった話を聞いて、たいへん驚きました。さらに、共学の大学に届く求人が、優先的に男子学生に紹介されている、ということも耳にしました。これは私が学生だった、もう30年も前のことなので、今はそんなことはないと思いますが、女子大学という環境

に守られていた私は幸せだったと振り返ります。

もちろん、ジェンダー不平等はあってはならないことです。ただ、完全なジェンダー平等を目指しつつもそれが果たされていない今、理不尽な差別から生徒や学生を守る、そして社会で十分に頑張っている強さを身につけさせるという観点から、女子校・女子大学は大切な存在だと思っています。

また、現在、新型コロナウイルス感染症の流行、ウクライナ侵攻などの問題が起きている状況下で、差別の問題や社会の分断などといった、これまで潜在していた問題が顕在化しています。こういう困難な時代だからこそ他者への理解というものが大事です。単に感情的にかわいそうだということではなく、相手、他者の立場、考え方を理解しようという姿勢が求められます。大学は多様な人と出合える場であり、気づきの場です。学生のみなさんは、多様な人と触れ合い、様々な書物に学び、経験を積む中で、自分の知らない世界を知り、視野を大きく広げてほしいと願っています」

今回の講演会は、女性の教育機関として歩む本学の意義を再確認する時間となりました。これからの100年を見据え、教職員として、『攻め』と『守り』を意識しながら、時代にあった教育を展開していきます。

〈文責〉十文字学園女子大学・女性学研究 所 池田まさみ・星野祐子

全校生徒による自彊術はまさに圧巻！



各学年色違いの100周年記念Tシャツを身につけ、様々な競技を行いました。これは自彊術体操の様子です。

「中高合同体育祭」で 共有された高揚感と一体感

新型コロナウイルスの流行で十文字中学・高等学校の日常は大きく制限されました。そんな中、感染予防対策を十分に講じたうえで中高合同体育祭が挙行されました。

創立100周年を祝す「十文字中学・高等学校合同体育祭」が、東京体育館（東京都渋谷区千駄ヶ谷）で大々的に実施されたのは2022年9月13日のことでした。

体育祭は開会の辞・選手宣誓で幕を開け、

大きく、中学の部、中高合同の部、高校の部に分けて行われましたが、特に中高合同の部や全学年参加の自彊術体操では、これまでに味わったことのないような高揚感や一体感を共有することができました。

十文字一夫理事長と横尾康治校長の開会の辞に続いて行われた中学生と高校生の代表による選手宣誓。



東京体育館の大型スクリーンには、生徒たちのイキイキとした表情がリアルタイムで映し出されました。

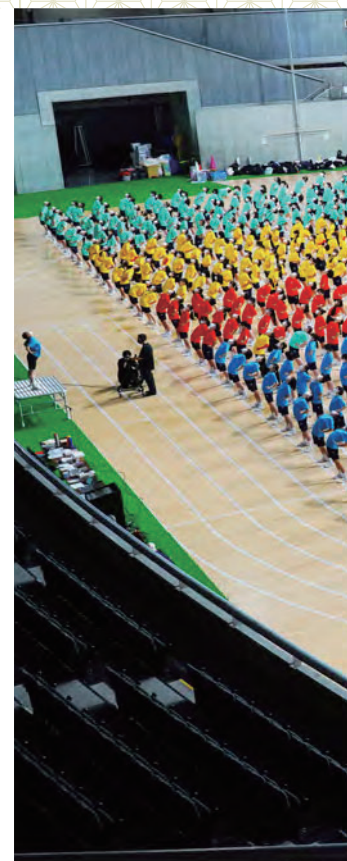




「美女の宅急便」や「綱引き」なども行われ、生徒たちは思う存分、体育祭を満喫しました。



十文字生は集団種目でも個人種目でもベストを尽くしました。



バトン部による華麗な演技



高校生(左)の緻密な演技と、中学生(右)による清楚な演技に観覧席からは温かい拍手が上がりました。



さすが！
日本体育大学体操部が演技披露

特別参加してくれた日本体育大学体操部による演技。ダイナミックな演技にみんなが目を奪われました。



おおいに盛り上がったリレー

仲間の活躍を全力で応援し、さらに友情を深めるのが十文字生！そんな生徒たちの躍動する姿を、創立者の十文字こと先生も遠くから見守ってくださっているような、心温まる体育祭でした。

東京国際フォーラムで

「100周年記念 発表会」を開催



オープニングイベント



「十文字学園校歌によるファンファーレと序曲」の演奏。
重厚かつ華麗な演奏にみんなが引き込まれました。

吹奏楽部



オープニングに引き続き、吹奏楽部が「Sing Sing Sing」などを披露しました。

マンドリン部



マンドリン部が「THE FIRST TAKEメドレー」を演奏し、会場からは手拍子も起きました。

第一部

日頃の練習の成果をみごとに披露した生徒たち

2022年10月3日には、東京都千代田区丸の内、東京国際フォーラムで、十文字中学・高等学校の生徒たちによる「100周年記念発表会」が開催されました。

それは、十文字学園の創立100周年の歴史を振り返りつつ、「新しい教育観のもとに飛躍的な発展を期し、生徒による生徒のための発表会」を目指したイベントでした。

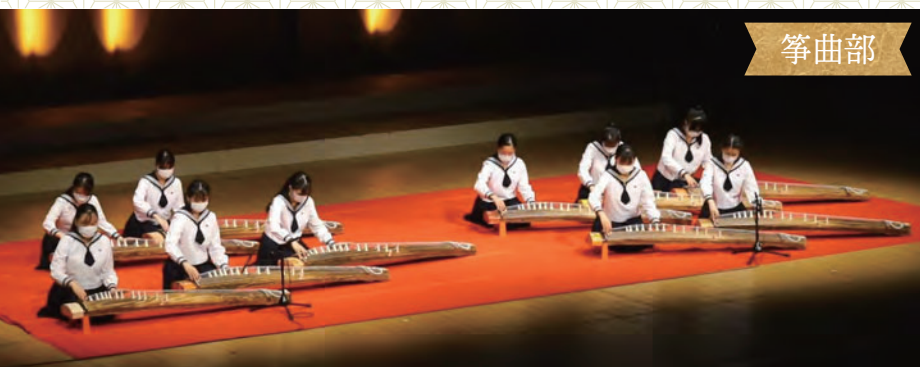
会場となった東京国際フォーラムCホール（定員1500名）はほぼ満席。そんな中で、イベントのオープニングを飾ったのは、吹奏

楽部による「十文字学園校歌によるファンファーレと序曲」の演奏でした。

吹奏楽部の演奏後、十文字一夫

理事長から、次のような挨拶がありました。

「コロナの影響もあって準備もたいへんだったと思います。先生方、



箏曲部

十文字こと先生の時代から受け継がれてきた箏曲部による「越天楽今様」の厳かな演奏。



音楽部

音楽部による校歌の合唱。コロナ禍で、会場みんなは歌うことはできませんでしたが、心の中で唱和しました。

出演する4つの部の部員の皆さん、準備にあたった生徒の皆さん、本当にご苦勞様でした。さあ、皆さん、いっしょに楽しませよう」そしてその後、岡本英之法人本部長のリードで、生徒全員が大きな声で「おめでとうございます。ありがとうございます」と唱和。式典が開催されることを祝うと同時に、開催にあたってご尽力いただいた方々への感謝の言葉を捧げて、いよいよ第一部が開幕しました。

この第一部では、オープニングに続いて吹奏楽部による演奏が始まりました。続いて登場したのは、マンドリン部、箏曲部、音楽部でした。各部の部員たちは、日頃の練習の成果を披露しました。Cホール内には、とても素敵な音色が響き合い、ホールを埋め尽くした全校生徒と教職員、それ以来賓の方々からは大きな拍手が沸き起こりました。

第二部

生徒たちが企画・制作したスライドショーを発表

第一部の終了後、横尾康治校長の挨拶で第二部（100h Anniversary Junonji）が始まりました。

横尾校長は、現代とは比べ物にならない過酷な時代を生き抜き、学園を創設した十文字こと先生の人生を振り返り、生徒たちに呼びかけました。

「10代という青春時代に悩み、怒

り、分かち合い、笑う。その経験のすべてがあなた自身という個人をつくります。その大切な時期にどんな思想を根幹に置いたかが、皆さんの人生を決定します。

建学の精神を礎として、成長している皆さんです。その皆さんに期待している未来があります。この先生のように、一人ひとりが学びたいという思いを強く抱き、よりよい社会の実現を目指してください。互いを認め合い、誰もが活躍できる社会を目指して、皆さんがますます活躍してくれることを期待しています。100周年を記念して、私の挨拶とします」

この横尾校長の挨拶後、「十文字祭・中央委員会企画」のスライドショーが上映されました。

スライドショーは、文華高等学校の創設時から始まり、現在に至るまでの十文字学園の歴史をまとめた力作でした。

その後、建学理念コンクールの授賞作品の朗読が行われ、現在の十文字中学・高等学校の様子をおさめたスライドショーが映し出され、第二部の幕が下りました。



#Clean Up Otsuka

巣鴨発



大塚駅周辺の清掃活動に参加した十文字の生徒たちと教職員

5月30日、十文字中学・高等学校の生徒たちは、「大塚駅周辺の清掃活動」(#Clean Up Otsuka)に参加。大塚駅北口・南口・都電周辺の3エリアに分かれて作業を行い、地域の方々と交流も深めました。

社会貢献活動で 輝く十文字生

交通安全運動・交通安全イベント

巣鴨発



巣鴨駅前交通安全運動に参加



「巣鴨交通安全イベント」で演奏する吹奏楽部

9月29日と12月4日には、十文字中学・高等学校の生徒たちが巣鴨警察署と協力して、巣鴨駅前交通安全運動に参加。また吹奏楽部が、巣鴨のとげぬき地蔵尊で行われた「巣鴨交通安全イベント」で演奏を披露しました。

十文字学園の生徒・学生たちは、地域の社会貢献活動に積極的に参加して、地元の方々に感謝されると同時に、自らをおおいに成長させています。2022年度の主な活動を紹介しましょう。

2022Xmas Otsuka SDGs Event

巣鴨発



ウクライナから避難してきた方々の前でクリスマスソングを歌う十文字の生徒たち

12月18日には、豊島区に住むウクライナからの避難民の方々とクリスマス交流イベント(2022Xmas Otsuka SDGs Event)に参加。異文化を学ぶと同時にSDGsについても学びました。

パープルリボンパネル展

新座発

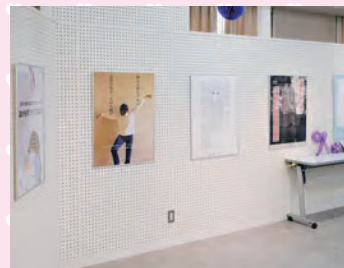


荻掛愛美さんの作品



活動に参加した川瀬ゼミの学生たち。みんなで様々な視点からアイデアを出し、全員で講評し合いながら制作しました

新座市役所内市民ギャラリーの様子。同ゼミの学生が本展のために作成したポスター（A1サイズ）全10点の作品が展示されました



新座市役所において、11月15日～22日に開催された「パープルリボンパネル展」は、内閣府が定める「女性に対する暴力をなくす運動」に合わせて、新座市が企画・開催したもの。このパネル展に、十文字

学園女子大学社会情報デザイン学科の川瀬基寛ゼミの学生がコラボ参加。制作したオリジナルポスターを展示しました。またパネル展開催中の11月18日には、「パープルリボンの作成を来庁者に呼び

「DVの中でも、デートDVは誰でも身近に起こりうる問題であり、自分たちだけで解決するにはとても難しいことだと思っています。もし自分が相手に傷つけられた、または傷つけてしまったら、抱え込まずに信頼できる人に相談して一刻も早く解決して欲しいと思います」

制作にあたったゼミ代表の荻掛愛美さん（社会情報デザイン学科3年生）は次のように訴えます。

そこで、地域連携という視点から、新座市から参加を呼びかけられ、初の新座市とのコラボレーションが実現したのです。

制作に当たったゼミ代表の荻掛愛美さん（社会情報デザイン学科3年生）は次のように訴えます。

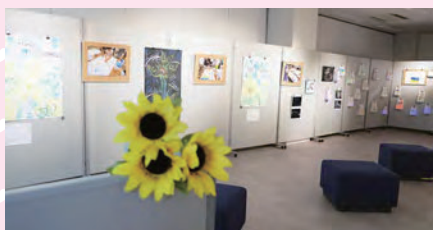
「DVの中でも、デートDVは誰でも身近に起こりうる問題であり、自分たちだけで解決するにはとても難しいことだと思っています。もし自分が相手に傷つけられた、または傷つけてしまったら、抱え込まずに信頼できる人に相談して一刻も早く解決して欲しいと思います」

掛けるイベント」に参加。展示したポスターの説明を行い、デートDV防止の啓発に努めました。

そもそも、川瀬ゼミは2014年に埼玉県男女共同参画課とのコラボによるデートDV防止啓発パネル制作を始めて、練馬区男女共同参画センターでのパネル展に協力するなど継続的に活動してきた実績がありました。

ウクライナのひまわり畑アート展

新座発



新座市役所内の市民ギャラリーに展示された「ひまわり畑アート作品」



平和への願いを込めて手形を押す子どもたち

「平和が一番なのでウクライナでは当たり前前の日常が送れるようになってほしいです。アート展は直接的な支援ではありませんが、展示することで募金などほかの支援に関心を持ってもらえればと思います」

参加した児童教育学科3年の齋藤真里奈さんは、次のように話します。

「平和が一番なのでウクライナでは当たり前前の日常が送れるようになってほしいです。アート展は直接的な支援ではありませんが、展示することで募金などほかの支援に関心を持ってもらえればと思います」

そして7月15日から20日までの5日間、新座市役所市民ギャラリーで戦禍のウクライナへの応援活動として、「ウクライナのひまわり畑アート展」を開催（共催：新座市教育委員会）。参加した学生たちは、ウクライナに1日でも早く平和な日々が戻るように、ギャラリーを訪れた市民の皆さんと祈念しました。

参加した児童教育学科3年の齋藤真里奈さんは、次のように話します。

そして7月15日から20日までの5日間、新座市役所市民ギャラリーで戦禍のウクライナへの応援活動として、「ウクライナのひまわり畑アート展」を開催（共催：新座市教育委員会）。参加した学生たちは、ウクライナに1日でも早く平和な日々が戻るように、ギャラリーを訪れた市民の皆さんと祈念しました。

参加した児童教育学科3年の齋藤真里奈さんは、次のように話します。

十文字こと物語 最終回

今も生き続ける 学園創設の大志

【創立者生誕150周年を迎えて】



(1870～1955)

まだまだ十分な女子教育が実現されていなかった大正末期、十文字ことは夫・大元だいげんの死後、「心身を鍛錬し、健全な女子を育成する」という大きな目標を胸に、日本の女子教育のさらなる発展に全身全霊を捧げていくこととなった。文華高等女学校では「自彊術」じきやうじゆつが正科に取り入れられた。ことはいつも早朝から道場に足を

運び、白シャツ1枚、紫の袴はかまに白い帽子という姿で生徒たちの先頭に立って指導にあたった。また、教育者としてばかりではなく学校経営の第一線にも立ち、学校の敷地拡張、校舎の増築にも力を注いだ。生徒たちのために設備の整った校舎を建設したい……。それが、ことの悲願だった。

欧米諸国への 教育視察の旅

1929（昭和4）年、ことは、同年8月にスイスのジュネーブで開催された第三回世界教育会議に出席。それに合わせて欧米の学校や教育施設を見て回る帝国教育会の「欧米教育視察団」の団員とし

て、欧米諸国の教育を視察する旅に出た。

この旅は、朝鮮半島を経て、ロシア、スイス、ポーランド、オーストリア、チェコスロバキア、ドイツ、ベルギー、フランス、イタリア、オランダ、ポルトガル、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、イギリス、アメリカを巡る

というもので、帰国したのは1930（昭和5）年1月3日のことだった。

ことは帰国後、次のような感想を口にしていく。

「かの地の私学は公立以上であり、世界に有名な学校は大抵私学であることであり、さらにその長所としては、校舎建築の整備していること、運営の基礎の堅固なこと、独立自営であること、教師に人材を得ていること……」（出典…『十文字こと先生傳』十文字こと先生伝刊行会）

この旅で、ことは日本の教育が世界から大きく遅れていることを実感した。そして、文華高等女学校のさらなる変革を目指していったのである。

こと、64歳で校長就任

1935（昭和10）年1月28日、ことは文部大臣の許可を得て、文華高等女学校の校長に就任した。

文華高等女学校は、そもそも戸野みちる、斯波安しばやすといっしょに創設した学校だったが、教育方針や校舎等の近代化を巡って意見が分かれた。そこで何度も話し合いが



ことの「自彊術」指導時の服装。
1927（昭和2）年撮影。



文華高等女学校校長に就任。こと64歳。



完成した鉄筋コンクリートの新校舎。



教育視察の旅でのひとコマ。スイスのペスタロッチ像の前で撮影。この旅には、金門商會を継いでいた長男・俊夫と、三女のよしも同行した。

私学の大切さ実感

重ねられたが、結果的に、ことがひとりで学校経営のすべてを引き受け、校長の重責も担うこととなったのだ。

そのとき、ことは64歳……。当時としては高齢であり、長男の俊夫をはじめとする子どもたちは「そんな苦勞をする必要はないのでは」と強く反対したという。しかし、ことの教育にかける強い思いは変わらなかった。ことにとつて、教育の仕事に就くことは少女時代からの夢だったし、その仕事が好きだった。「余生を教育事業に捧げることが許してほしい」と訴えることの熱い想いを前に、子どもたちは、校長就任を認めざるを得なかった。そしてひとたび母の校長就任を認めた俊夫は、その後、全面的に学園運営に協力していった。

私財を投じた 新校舎建設

校長就任から2日後、ことは豊島区巣鴨6丁目1257番地（現在の北大塚1丁目）に、私財を投じて2800坪（約9256㎡）の土地を購入した。新校舎建設のためだった。

翌年の1936（昭和11）年2月18日には新校舎の起工式が行われ、同年12月20日に竣工した。完成した新校舎は、当時としては極めて先進的な鉄筋コンクリートの3階建てで、2階建ての立派な講堂や屋内体操場も併設されていた。

十文字高等女学校の誕生

1937（昭和12）年4月1日には文華高等女学校から十文字高等女学校への校名変更も実施された。この校名変更にあたり、ことは公共の存在である学校に十文字という自分の姓をつけることに消極的だったという。

しかし、よくよく考えたうえで、「十文字」の「十」の字は、中心から四方へ公平に分けられ、端をつなげば円になる。上下左右分けてなく、平和に皆を結び合い、助け合って円満にいく。また、「十」は「十分の十」でもある。そんな「十」の字の学校ということとで「十文字」と名を冠することとを決意したのだった。このとき、校名変更に合わせて校章も一新された。こうして名実ともに、十文字高等女学校が誕生した。



戦争中のことと十文字の生徒たち。

この時期、教頭になったのは、教育の中心は生徒であるとする「新教育の先駆者」として知られていた秋葉馬治^{あきはうまし}だった。また、地理・歴史の専任教師には、日本マラソンの父・金栗四三^{かねぐりしぞう}が就いていた。十文字学園の伝統である「文武両道」は、十文字高等女学校の誕生当時から始まっていたのである。

こうして生まれ変わった十文字高等女学校は、素晴らしい校舎を有する東京有数の私立学校として広く知られるようになり、いつし

か人々から「丘の上の女学校」と呼ばれる存在となっていた。

だが、激変する時代の波に呑み込まれ、日本は次第に戦時体制へと移行していった。1937（昭和12）年7月には日中戦争が勃発^{はつぱつ}、翌年には国家総動員法が公布された。そして1941（昭和16）年12月には、ついにアメリカとの戦争（太平洋戦争）に突入。その影響は生徒たちの生活や学校教育の場にも及んでいた。

焼け落ちた 「丘の上の女学校」

文部省の指導によって着るものさえ制限されるようになり、十文字の制服だったセーラー服もヘチマ襟の上衣とヒダなしスカートに、さらにスカートがもんぺに変わっていった。

また国の方針で、英語の授業が減らされ、教科書から親英・親米的な表現が削られた。「敵性語など教える必要はない」と英語の授業を全廃する学校も続出した。

十文字高等女学校でも、英語の授業のコマ数を減らさざるを得なかった。だが、ことは英語の授業は頑として継続させた。

「これからの時代に国際感覚を身につけることが必要であり、英語学習は不可欠である」という強い信念があったからである。

また、ことはアメリカの強大な工業力を正確に認識しており、密かに日本の行く末を憂慮^{ゆうりょ}していた。日本は勝てないと……。

果たして、戦況が悪化するにつれ、生徒は勤労奉仕や学徒動員に駆り出されていった。そして1944（昭和19）年11月24日を皮切りに、東京は米軍による空襲にさらされるようになった。

1945（昭和20）年4月13日夜から14日未明にかけて、330機ものB-29が襲来。豊島区、板橋区、滝野川区、王子区などは火の海となった。後に「城北大空襲」と呼ばれることとなる大空襲だった。十文字高等女学校も、このの家も、金門商会の工場も灰燼^{かいじん}に帰した。

このとき、ことは長男・俊夫の強い勧めで、栃木県の今市町（現在の日光市）に疎開していた。74歳になる自分が東京に残って足手まといになることを慮^{おもんばか}っての苦渋の決断だった。

心血を注いでいた学校焼失の知

らせを受けたことは、すぐにも東京に戻りたかった。しかし、それが果たせない中、ことは、俊夫に次のような手紙を送った。

「前途は少しも悲観することはありません。学校を復興し、工場は焼ける前のようにメーターをつくらばいいのです。ただ一心に仕事をするだけです」

再開された 仮校舎での授業

十文字高等女学校は、東京女子高等師範学校附属高等女子学校（現在のお茶の水女子大学附属中学校・お茶の水女子大学附属高等学校）に間借りする形で、5月1日から授業を再開した。

それから3か月後の8月15日正午、ラジオから玉音放送が流され、日本国民は日本の敗戦を知った。

その後の10月15日には、十文字高等女学校は聖学院中学校の教室を借りることとなった。ようやく疎開先から東京に戻ってくることでできたのだ。ことは、生徒たちを前にこう語った。

「私は裸で生まれてきました。今また、その裸に戻ったからといってビクともいたしません。みなさ



空襲で焼け野原になった巣鴨周辺。1945（昭和20）年9月、アメリカ軍が撮影。

ん、今までよく辛抱してきました。本校再建まで、あと少し我慢して、一生懸命勉強してください」

ことは駒込林町（現在の文京区千駄木）の仮住まいから都電で聖学院中学の仮校舎まで通いながら、1日も早い学校再建を目指した。しかし、私財は1936（昭和11）年の新校舎建設のときになげうっており、先立つものがなかった。

震災保険金が支払われることにはなっていたが、それではとても校舎の復興は不可能だった。ふと弱気になって「廃校」の二文字が頭をよぎることもあった。

そんな中、学校再建のための寄付金を募ろうと生徒の父兄らによる「学校復興後援会」が組織された。こうした父兄たちの協力に対して、ことは「相すまぬ、相すまぬ」と感謝の言葉を繰り返すと同時に、「教育こそ我が身に課せられた使命だ」という想いを改めて胸に刻み、学校再建への不退転の決意を固めたのだった。

巣鴨への帰還と新たなスタート

1945（昭和20）年を境に、日本ではそれまでとはまったく異なる教育が行われることとなった。いわゆる戦後民主主義教育だ。そのため、日本の教育現場はおおいに混乱したが、ことの「心身を鍛錬し、健全な女子を育成する」という信念はまったく揺らいでい

かった。

前述したとおり、十文字高等女学校の校舎は消失、生徒たちが使う教科書もなく、生徒数も教員数も激減していた。そんな状況下で学校を復活させるのは、誰の目から見ててもたいへんなことだった。だが、いったん心を決めた、この行動はすばやく、迷いもなかった。

国による私立学校建物戦災復旧貸付金などを借り入れ、1946（昭和21）年11月10日、校舎復旧の工事を開始。翌年の1947（昭和22）年3月30日には待ちに待った巣鴨への帰還を果たした。

その日、教職員も生徒もいっしょになって、駒込から巣鴨まで机や椅子を持って引越作業が行われた。学校の外壁は煙ですすけ、廊下の壁や床は焼けたコンクリートそのままで、ところどころ鉄骨が剥き出しになっていた。使える教室は限られ、ひとつの教室に80人ほどが入り、みかん箱が机がわりに使う生徒もいた。それでも、みんなの心は「自分たちの学校」

に戻れた喜びにあふれていた。

この巣鴨への帰還がなかった翌々日の4月1日には、戦後の学制改革にもなつて十文字中学校が開校した。さらに翌1948（昭和23）年には十文字高等学校が開校し、ことは両校の校長に就任。十文字高等女学校はその役割を終えた。

こと80歳……。新たなスタートだった。そして数日後には、巣鴨の校舎で戦災後初の入学式が行われた。

優秀な教員の採用が十文字の教育を支えた

新たな学制改革にともない、教師たちも新たに学ばなければならぬことが少なくなかった。ことも校長としての資格を取る必要があった。だがことは一切苦勞を厭わなかった。通信教育で勉強しつつ、各種の講習会にも積極的に参加し、孫といつてもいいほどの若い教員たちと席を並べ、熱心にノートを取った。

不撓不屈の学風育む



1950 (昭和25) 年当時の先生方。前列中央がこと。

また戦後の教師不足が続く中、ことは1946 (昭和21) 年から1950 (昭和25) 年にかけて、秋葉馬治の人脈を通して、校長経験者をはじめとする五十数人のベテラン教員を採用した。教科書がなくても自らの判断で授業が進められる人材だった。それと同時に、能力のある若手を採用



藍綬褒章授章記念祝賀会でのこと。

することも忘れなかった。こうして十文字には幅広い年齢層の優秀な教師が集まり、ベテランの教師が若い教師を適切に指導していく空気がみなぎっていった。それが生徒たちに対する質の高い教育の提供に結びついていったのである。

念願だった 体育館と講堂の完成

1949 (昭和24) 年11月1日には、体育館の再建に着工、翌年の1950 (昭和25) 年7月10日に完成した。「これで、やっと生徒の体力を鍛



1952年の体育大会で、生徒に賞状を手渡すこと。このころ、ことの生徒の自主性を重んじようという方針で、生徒会活動や、文化部・スポーツ部ともに活動が盛んになった。

える場所ができた」と、ことはたいそう喜んだという。1951 (昭和26) 年3月1日には、学校の運営母体だった「財団法人十文字高等女学校」を「学校法人十文字学園」へと組織変更して、ことが理事長となった。また、同年5月3日には、藍綬褒章を授与された。

さらに1952 (昭和27) 年11月20日には、ことが「できるまでは死ねない」と言っていた講堂も完成した。

ことは、講堂を校歌にある「心きたへて」を実現する修業道場と位置づけ、その復興を心から望ん

でいた。同年12月6日に多くの父兄を招いて行われた落成式で、ことは次のように述べている。

〈考えてみますと、敗戦によって日本人の心はその根を失いました。そして、その心で軽々しくアメリカの外形を模倣して、軽薄な心にならなかったでしょうか。若き世代の子女は、その影響を心のどこかに受けなかったでしょうか。〉

その心に落ち着きと気高さを持たせて、新しい日本の中堅婦人をつくりたい。それは、私の今の青年子女を見るにつけてのやむことのない深い願いであります。講堂を復旧して、その精神教育の助けにしたい—— (出典:『十文字と 自強不息』(学校法人十文字学園)

式辞を述べることは、涙で詰まって途切れがちだった。

生徒たちの人文字に送られた十文字ことの旅立ち

1953 (昭和28) 年6月28日、金門製作所 (旧金門商會) を引き継ぐとともに、十文字学園の理事として育英事業にも尽力していた長男の俊夫が亡くなった。48歳という若さだった。母として、息子に先立たれた喪失感がいかに深いも



ことの寿像除幕式。横に建っているのは、ことの跡を継いで理事長となった十文字良子。



こと先生が亡くなったまさにそのとき、こと先生を見送るかのように、生徒たちによる「十文字」の人文字が学園の校庭に浮かび上がった。

教育の夢永遠に

のだったかは想像するに余りあるが、ことは周囲に取り乱す様子など見せず、気丈に振る舞っていたという。

だが、それから8か月後の1954（昭和29）年2月21日に脳溢血を発症して右半身の感覚を失い、自宅で寝たきりの日々を送ることとなった。

病床にあっても、ことは「卒業式は？」「生徒の就職は？」「入学式は？」と、学校のことを常に気にかけていた。そのため、周囲は病室で学校の話題に触れないように気を遣った。そのいっぽうで、妹のきうが郷里から見舞いに来たときには「丹波へ……丹波に連れ

て帰っておくれ」と繰り返し訴えたこともあったという。近しい人は、そんなことの姿に胸がつぶれんばかりの想いを抱いた。

その年の11月20日、かねてから進められていた、ことの寿像（その人が生きていた間につくっておく像）が完成し、除幕式が行われた。制作にあたったのは東京藝術大学出身の小野田はる……ことの外孫（長女・なかの娘）であった。

ことはそれを待つていたかのように、目に見えて弱っていった。そして翌1955（昭和30）年5月17日正午、ことは苦しみくなく、まるで大海の潮が引くように、穏やかに旅立った。

まさにそのとき、十文字中学・高等学校の校庭には生徒たちが集まり、上空を飛行機が旋回していた。この日は学園全体を空撮することになっており、生徒たちは「十文字」の人文字を描いていた。ことの魂は、愛しい生徒たちの人文字に送られて、天上界へと向かっていったのである。

1870（明治3）年に京丹波の山間の農村で生まれた十文字ことの一生は、まさに明治、大正、昭和と激動する日本の歴史と共に

刻まれた。

努力に努力を重ねて教育者としての第一歩を踏み出し、結婚して子育てをしながら夫の事業を扶けた後に、再び教育者への道へと戻っていった彼女の一生は、まさに日本の女子教育への熱い想いが貫かれていたといえよう。

そしてその想いは、十文字学園の確固たる文化と伝統となり、二代目理事長の十文字良子、三代目理事長の十文字一夫へと受け継がれ、今も十文字で学ぶ生徒・学生たちの精神的支柱であり続けている。



こと先生の生誕地・京丹波町の小学校で こと先生のお話が!!

2022年11月21日、こと先生の生まれ故郷である京都府船井郡の京丹波町立瑞穂小学校で、4年生の児童たち全員を前に、「十文字こと先生」についての授業が行われました。こと先生について語り聞かせたのは、京丹波町議会議員である鈴木利明氏でした。鈴木氏が、こと先生について子どもたちに語り聞かせたのは、2021年に続いて2回目のことでした。

実は、瑞穂小学校は、こと先生が通っていた明俊小学校の他、桧山小学校、三ノ宮小学校、質美小学校が統合して、2011年4月1日に開校した新しい学校ですが、『明俊校 閉校記念誌』（京丹波町教育委員会 明俊小学校閉校記念事業実行委員会 2011年3月発行）には、こんな記録が残っています。

〈昭和17（1942）年4月29日 十文字こと（下大久保出身）よりピアノの寄贈を受ける〉

昭和17年と言えば、太平洋戦争が始まった翌年のこと。ピアノはとても高価なものでしたが、こと先生は、故郷の子どもたちを思い、ピアノを寄贈したのです。きっとこれからも、京丹波町では、こと先生は郷土の先人として語り継がれていくことでしょう。



中高・大学合同で運動部交流 スポーツイベントを開催

2022年8月11日、埼玉県新座市の十文字学園女子大学のメインアリーナで、中高・大学合同による運動部スポーツイベントが開催されました。

長引くコロナ禍で、運動部の活動も大きく制限されてきましたが、この日は、十文字中学・高等学校と十文字学園女子大学のバレーボール部とバスケットボール部がそれぞれチームを組み、思い切り汗を流しました。



「中学生、高校生、大学生がチームを組んで、先輩・後輩の交流ができたのが最高に楽しかった」と、みんな口を揃えます



バレーボールの試合では、
強烈なスパイクがさく裂！



バスケットボールの試合。
フリースローもばっちり決まりました！

高校サッカー部

全日本高等学校女子サッカー 選手権大会で準優勝！

十文字高校サッカー部は、2023年1月8日にノエビアスタジアム神戸（兵庫県神戸市）で行われた「第31回全日本高等学校女子サッカー選手権大会」の決勝戦に臨みました。決勝進出は、優勝を果たした2016年以来6大会ぶりでしたが、静岡県の藤枝順心に0-1で惜敗しました。しかし、これは夏のインターハイ準優勝、JFAファイナルズの準優勝に続くみごとな成績。高校サッカー部はNext-Oneステージを目指します！



主将の野口初奈さんのコメント「結果は惜しくも準優勝でしたが、このチームで最後まで戦えたことに悔いはありません。応援していただき、本当にありがとうございました」

中学サッカー部

全日本U-15女子フットサル 選手権大会で準優勝！

十文字中学校サッカー部は、2023年1月9日、日環アリーナ（栃木県宇都宮市）で行われた「JFA第13回全日本U-15女子フットサル選手権大会」の決勝戦に進出して、愛知県の朝日インテック・ラブリッジ名古屋スターチスと優勝を争いました。

試合は3-4で惜しくも敗れましたが、この準優勝という結果は前年に続く2年連続という輝かしいもので、十文字生にたくさんの元気と勇気を与えてくれました。



主将の松永美祐さんのコメント「何度か負けそうになった試合もありましたが、チーム一丸となって強い気持ちで戦えました。仲間と共に戦えたことを誇りに思います」

高校

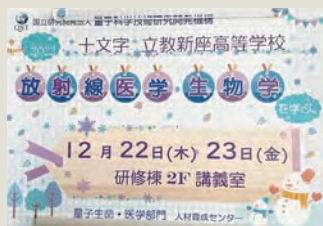
立教新座高等学校と放射線医学と生物学に関する合同研修会を開催

2022年12月22日と23日の2日間、十文字高等学校と立教新座高等学校の生徒が、量子科学技術研究所で行われた「放射線医学と生物学に関する合同研修会」に参加しました。

講義では、放射線に対する正しい知識を学ぶと共に、医学への応用も学びました。

実験では、電気泳動装置を使つてのDNAの解析やPCR法によるマウスの系統分析など、日頃、学校の授業で学んでいることを実際に確かめることができました。

またマウスの人工授精やがん治療に使う装置なども見学することができ、医療についても深く考えることのできた有意義な2日間となりました。



2日間にわたって専門的な研修が行われました



実際の研究で使われる器具を使用しました

大学

神田女学園中学校高等学校と高大連携に関する協定を締結しました

神田女学園中学校高等学校と本学は、2022年12月12日に高大連携に関する協定を締結しました。当日、神田女学園中学校高等学校の芦澤康宏学校長、十文字学園女子大学の志村二三夫学長をはじめとする9名が両校から出席。本学にて協定締結式を行い、協定では、以下の内容について締結しました。

○交流・連携を行う取り組み

- 1) 高大接続教育や教員の資質向上に関する取り組み
- 2) 新しい教育課題（アクティブラーニング、ICT活用等）への取り組み
- 3) その他、教育の質的向上に必要な取り組み

また、調印後に行われた懇談では、上記取り組みの他、本学で活発に行われている地域連携活動分野における交流・連携についても意見交換を行いました。



前列左：芦澤康宏学校長、前列右：志村二三夫学長

園庭のうた 2022 幼稚園行事・イベント



柿の収穫をしました

10月28日、年中さん・年長さんが、年少さんのために柿の収穫をしてくれました。みんなが頑張ってくれたので、たくさんの柿を収穫できました。

収穫した柿は年長さんが袋詰めをして、年中さん・年少さんのクラスに届けてくれました。



クリスマス会を行いました

12月16日、幼稚園で行われたクリスマス会には、サンタさんが子どもたちにプレゼントを届けに来てくれました。全世界を飛び回っているサンタさんですが、忙しい中でも各クラスを回って素敵なプレゼントを直接渡してくれたりハイタッチしてくれました。



＊ 十文字学園 創立100周年記念 「建学理念コンクール」受賞者一覧



建学理念や十文字こと先生の生涯について思うこと、感じ取ったこと、そしてそれらを未来につなげるために考えたことなどを自由に表現する「建学理念コンクール」。学園創立100周年を記念して、学園の生徒・学生や同窓生（さくら会会員・若桐会会員）に広く募集し、作文、詩、手紙、イラストなど、93名から100点の応募がありました。

選ばれた受賞者のお名前を下記にご紹介します（敬称略、関連記事8、9ページ参照）。
たくさんのご応募ありがとうございました。

理事長賞 （最優秀賞）

平川 あずさ（十文字高校・短大家政学科食物栄養専攻卒業生）

横須賀 邦子（十文字高校・短大初等教育学科卒業生）

校長賞

川島 楓菜（中学1年生） 曾我 優月（中学2年生）

横山友希乃（中学3年生） 石津 成葉（高校1年生）

学長賞

秋元 南美（大学1年生）

優秀賞

栗山 真由（短大卒業生） 岡田 美咲（大学1年生）

菅野 亜美（大学1年生） 坂田 悠花（大学1年生）

白川 莉有（大学1年生） 伊藤 萌佳（大学2年生）

小池 未来（大学3年生）

※受賞者の学年は2021年度時点



※詳細は右記サイトをご覧ください。



＊ 十文字学園100周年記念募金

当募金は2023年3月31日をもって終了とさせていただきます。今まで募金活動にご協力いただいた皆さまに、厚く御礼申し上げます。

皆さまよりいただいたご寄付は奨学金制度の充実、および教育環境の整備に活用させていただきます。

募金のお申込み総額や芳名録、具体的な使途や収支等のご報告につきましては、学園のホームページで公表いたします。

※詳細は右記サイトをご覧ください。



★お知らせ★

次号「立ちてかひある」第6号からは、スマートフォンやタブレットを利用して読むことのできるウェブマガジンとして学園ホームページに掲載いたします。今後も学園の情報を発信してまいりますので、ぜひご期待ください。

立ちてかひある
Vol.5

令和5年2月15日発行

発行 十文字学園

〒170-0004 東京都豊島区北大塚1-10-33
電話 03-3391-8051（代表）
〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28
電話 048-477-0555（代表）

発行人 岡本英之（十文字学園法人本部長）

編集人 本間 修（十文字学園法人本部長補佐）

副編集人 池間里代子（十文字学園女子大学教員）

柳澤 貞夫（十文字学園法人本部総務室室長）

原 一彰（十文字学園法人本部総務室課長〈広報担当〉）

鈴木 千尋（十文字学園法人本部総務室職員〈広報担当〉）

監修 大西 正行（十文字学園広報担当フェロー）

編集制作協力 ザ・ライオスタッフオフィス

印刷所 大観社

〈編集後記〉

学園創立100周年を寿ぐ本誌のゲラを校閲中、私たちの目頭が熱くなりました。建学理念コンクール理事長賞受賞作特集面で、▽内閣府で働く卒業生が、「生活上の情報・知識を必要としている人々の役に立てる」喜びを▽本学卒業後、再任用の校長先生が教え子に向かって、「人のため」に勉強する大切さを説く日々を、吐露されていたからです。

社会で「人のために」に尽くしてほしいと願って身を粉にする先生と、生徒・学生の教育現場の息遣いこそ、十文字学園の真骨頂なのだ。そしてこの伝統は、創立者十文字こと先生の壮志に根ざし、多くの先輩によって耕され、一世紀の風雪に耐えて今日に至っているのだ、と悟った次第です。

昨秋、十文字一夫理事長から「次の100年」特集企画で、本学園と御縁の深い先生方の御高見を紹介するアイデアをいただきました。学園創設時以来の「立ちてかひある」人材育成が一層切望される今日の喫緊性を洞察されてでしょうか、「学生たちにいまの困難さに立ち向かう元気を与えることしか、学園のすべきことではない」との激励も胸に刻みました。

〈艱難汝を玉にす〉の教えも『十文字こと物語』のゲラを読み返すたびに「我が事」として心に染みること一再ならず……。コロナ禍に留意され、本誌の編集に御協力いただきました各位に重ねて御礼申し上げます。

（「立ちてかひある」発行編集担当者一同）